晉宋齊玉粒作

逃賞索閒月

上卷

へ13
3767
1

門へ13
號3767
巻 1

靈龜鏡

晋米齋編撰
溪齋英泉畫
青林堂壽梓

壬午夏發兌

幽賞雲閒月

[illegible]

前編の小世の雪、蛇の目傘が傘に積りし、深の雪、あらく、欲の深に陥るも、只一面の浪黄昏に、迷の心の業なるべし、後編の雲間の月、桂男の佐次郎を照て於國が貞節も、夫人立る婦の道成、悟る意の故なべし、されば迷と悟の事、雪と月の如くにて、碌なる雪の降れ事、常に馴る通路も、何處が何なく、鼻の往復に途を失ふさやけ、青の月の蟻の遠本のも、義虫乃、動くも見えて、彩清き、是を女子の

鏡山いざ立ちて見て悉ん、這小冊の勧善懲悪、
墨らね新ハ玉粒先生一粒撰に精る、識者解の
稜津紀、筆ハ巧者の晋米ニ而べんく詞が書べん
なら、假名でも三編はん出ればと、猶側から豊
作のあたりを祈る僕も、何がし米の安賣に、チト古
臭く頭しく志のいぬ、

壬午初秋　向丘墨川亭雪麻呂

月序

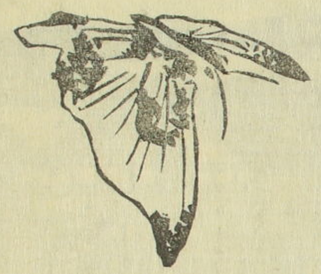
自叙

春臺先生嘗て謂る事あり。顔回が學を好むハ猶
劉伶の酒を嗜が如し。天下酒を嗜者多し。今古独劉
伶を称するハ何ぞや。唯酒を樂で他を知ざるゆ謂なり。
試に劉氏に勧て曰ん。汝を立て天子とす。以て天下
を保しむべ。只酒を飲事を禁ぞと云ハ敢て之を聽べ
かゝず。縱に酒を嗜ん事を欲して天子と為事を避ん。
顔子の学に於るも亦然りと。余故に云蛇目婆も亦

欲を嗜む者歟。又試に婆に曰ん。汝を后妃に備べし。唯貪欲を戒むと云バ。必后妃を辞て已が欲界に終ん。夏を冀ん。凡人善を嗜バ善を体とし。孝を嗜バ孝を体とし。悪も亦然なり。劉伶が酒顔回が学。太宰氏の言竭せり臻まり。此語を挙て以て叙に換る而已。

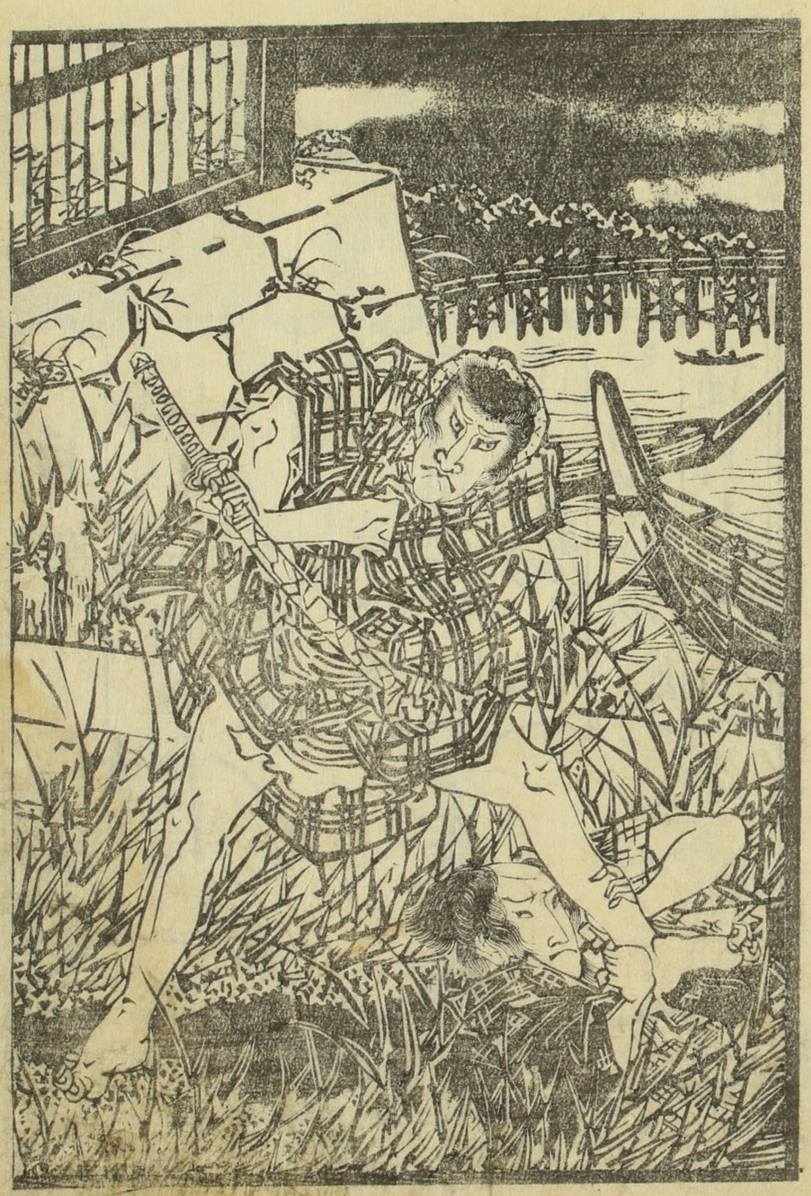
文政五年壬午 於藍亭之窗下 晋米齋 玉粒書

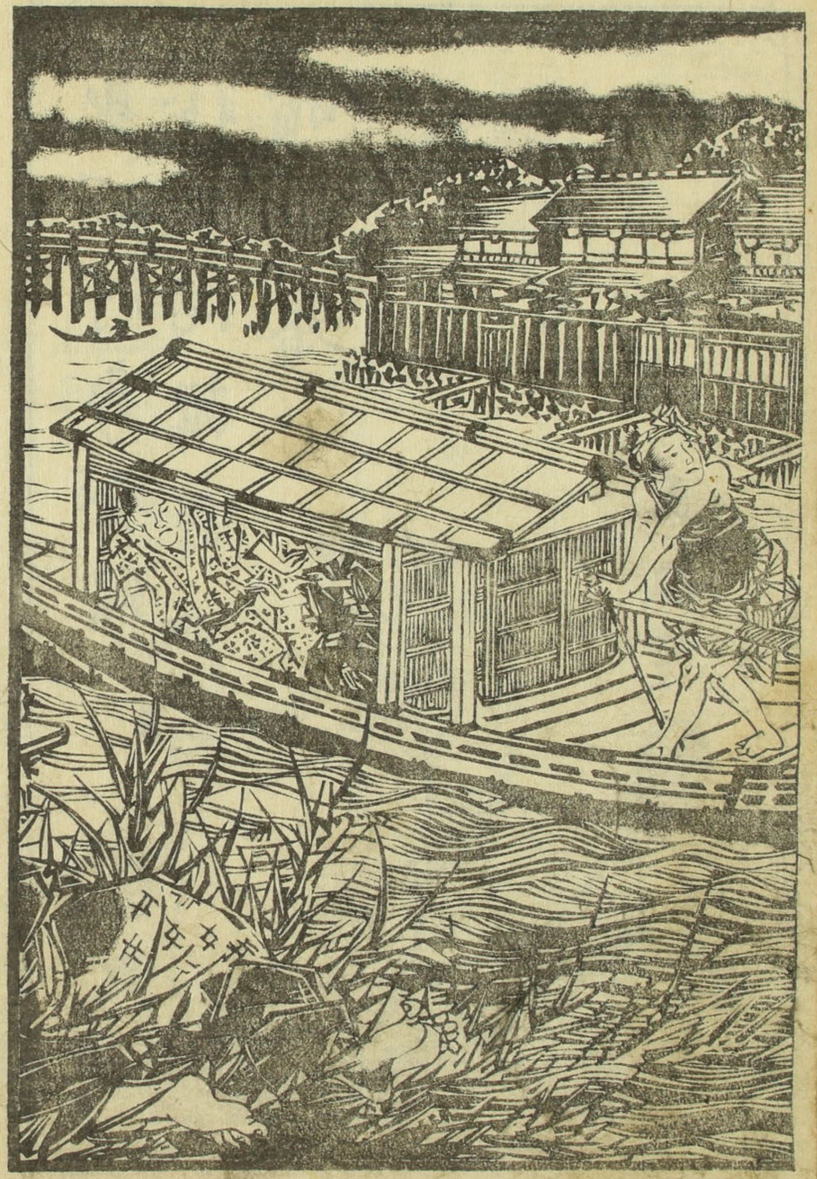
初秋之日



身似何郎全傳
粉心同韓壽
暗偸香

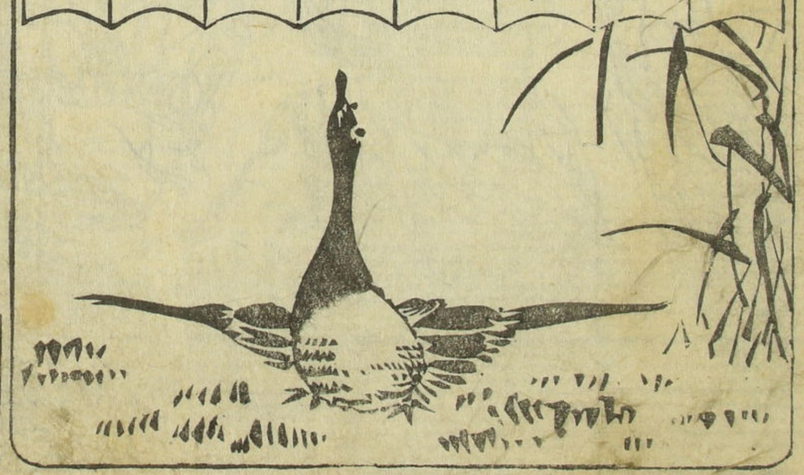
玉粒写





目録

一 花水橋の無此月
二 侘住乃深雪の月
三 書屋の残の月
四 青楼の卅日此月
五 扇屋乃立待月
六 行事川の夜乃月
通計六回



前編 貞操小笹雪 二冊 梅暮里谷峩作

次編標目 幽賞雲閒月上巻

江戸 晋米齋玉粒作

書林 善光寺大門街 向榮堂 蔦屋伴五郎

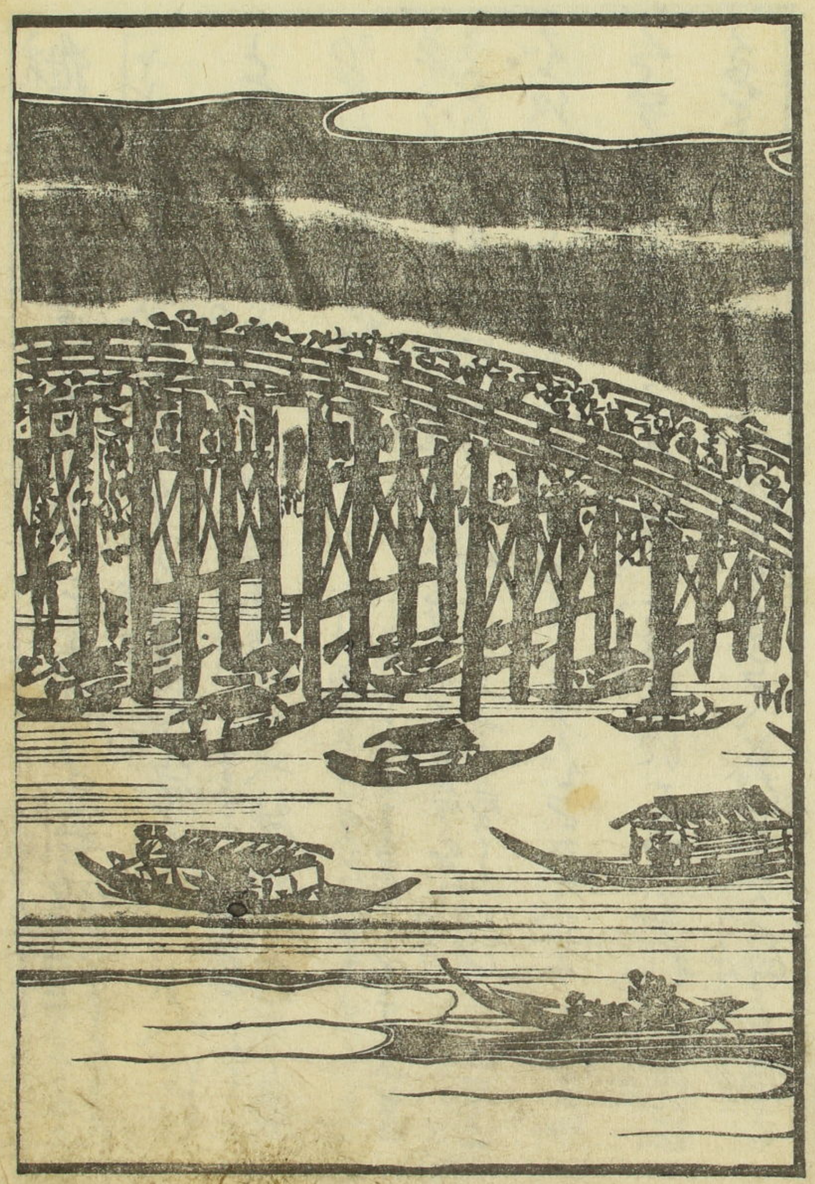
第一回

星月夜鐘倉山無遠近のたのきもしらぬ夏本立。水際晴れ湖そこなし。花の橋の夕涼ちかぐ人も戌の刻。三弦笛に夢ふ盃くて已が岸へと屋

舟。川辺淋しく小夜更ね。傍に雞ぐ屋根舟まく。
「そりや人ごろしと呼ぶる聲。あやめも志らぬ抜刀。
見く新にあり河ふ人ぐ。沼の浅瀬を泥まぶれ。
ちりぐに逃ぶる舳に跡ゆらし船頭が。こハかるハじと
沖中へ一棹ぐりとあまされて。お邦を切んと艦へ呉踏
かけし佐次郎ハ刀を持て其儀に後向さる所芦の中。
志だし打ち外みさりしが。濡ふ船を恨めしげに見ゆ。
「佐て我ながら迷ふさり。大福屋乃家に生れ何重なく

月上一

育ちし身が。かくふびいる見今の零落。濡ふに忘ひし
お邦さへ。淋しくが邪推にゆだされて。雞面人となりし
ゆゑ。忘ひ寃めし母拘ざんまへ。それさへ此身の本肖
から。果ハ上ともいふ。ずに只人ぐを強ぶせしのミ。恩
な所にも恥のうハねり。迷ふ活く甲斐なる此身。
さうぢや。南無河原陀仏トいひさるに刀逆なれとり
恵し。咽に当んとなるに打ちら。誰とも知らぬ聲を好。
「コレく若いのマア待ちしやれトいハれて佐「止さしやつて



川屋に屋居る人ぐぐを。玄釈もなく押のけ寛のけ。
いきゆ紀来る姫の目安。「ていきりこんなことがん付こが。
按の案。マアあらふとうあるめへとう。人の大変の姫をとうへて
大擔な。コレな想ふ来どの。此ちくが生れ付ての仏性。言ゆの
能のに付こんで。此方図も極へ。さうまどこに撥出されちやア。
もうく姫無体の結がきれこ。「コレく お食マアく志づつに
志てくごされ。疝でもついことはいでハなし。あとでどうとも此
ハなる。「イエ静に言ってハあられやせね。おやへ疝が清ろねへと

月上四

いひなさるが。コレ此ゆ法が鍾金寺の評判となり。モシ
後生の口にかゝりやア。もう札付のアノ姫。スリヤこれ疝とも
疝とも大きなどぢや掃雨のねへひけ物の。疝ぞ生も快
気ハ志まねへ此。廉治代ハどろ志りと一生ナどくむかつ
ぎりの。サ想ふ来どの挨拶してくごんせへのト。そろな雨から
さしこんでてこでも勤うね言ゆ止り。想ふ来殆りてあ過し。
あら立てハ事ぢやし。欺ほ子ほ過と弄ゆとはれ。「イヤモウ
脹くそるさのいつくところ。一こ在ゆ極るれど。コレしこも

由井が渓乃起き清ぢや。ハテ西げを渓まもせねばとた。
サア家ろう出に向ふ川岸。雪の下の白鉾橋で。何も角
もと川人りと 蛇 「さうコろりやア面白へもとうころちハるゆハ
ぬまね。ハテ勇公あまバこぼしぶの人までも。たてひたづく
とりいふとも。對待遠くバいつでもるゆハ崩されるどうで紫
美の素合手。揖のとりやう沙村の。ホンニ此無ハ蕊燈が
無ハ。もし和尚さん此三人と小舟で向ふへもしエあの仝。
さんがせとあれさい何をもも。此且那がノツレいて世うにさろ

しゆるだや。のこゝ為ましたるエ。トひとりでしやべる舌三寸。ゑゑ
でもさらね蛇の目渉 和尚 「アイ且那できましたト少無紙
つけまバ三人ハ無ろう無く無ふ楊り。向ふの河岸へと漕
けたり。ゆゑで縫き夏の夜の八日ばかりの月代も。やち
こちくらき場所の陸。○ 喜まやこゝに佐ゑ郎ハ彼盗
人に巧謀られ刀をうばられそのうへ。踏倒されて
涙まぶま。途方くれて忙持と死よ志るれね。柏を援。
痛む足撫ふこしめく。さひ出して乱柱を拳覚らんと

なほところへ最おの若者どもこれを見付て立かり。
「そりやさろ殿のまねけめが。こにゐるぞこゐこゐ〳〵ト
いふやいなてんでにありのみ推乳切木なさけをしらぬ
佐二さらがはびるのを耳にもさらに当入ぼうちすくめる多きなんぎかる
西へ志三郎八帳の目張に今を与へ一方の雅八逆まし
しが西の人へ無沙汰ましてハ。疎後寝て幼陸と出西
たち帰り此躰見るより割て入り 志 「コリヤ〳〵こゝろき爲て
マア待てくださりませ。これはハざん〳〵沢のあるなり。
此しことの万遠で。もとより又此人が。おまへがたに對し

眼のあらう無うも迄。ひらに此姉ハ見しにくだされ 「イヤ
こりやをりしい。いはでき事も此神命ゆやア。どんと言ぶんある
ならばを肩持ぶそ六おり門せへ。怪我でもねへうちそこのいふ。
佐二 「イヤもし志三郎さまとゆう眼くのお志ハ嬉しうござり
まほが。もとこしが身から仕出し出殺おまへに出助労うけ
るも命の毒こしや存分にありますわどふ。おまへハ泣んで
くださりませ 志 「イヤ〳〵そりや悪いう筈ありやまだこゝろ爲
なれいこそう。出世おの身をもつて。コレサまるをとハいふね程に。

寂かりずとぞ。サアそろそろく。○時鈎められ是非もなく
此坊主ハ想ひ乱れたらも任せ心地して立去れバ。亭主
人ぐにわらぢはきひ「コレハくどうでござるもようござりのよ
まちなさへござるでござりますゆへ。コリヤあまり早かや
ぐ。○ごー酒でもおあがりて後を来しハ数多く左事でござり
ませ。○ト ごろごろぶんの井から名に縁ある山家色一段
尚ハ六欲に目の華ある人に按摩も後もなく想
亭坊ハ我家をさして立帰る。○ほどなく「ナント伝こうらなく

徐にはひど「ヨイサこうらすぐに極楽寺の縁側堂。其
一盃のんでお手の鼓「ぎおん囃子おりれ。○ト あの〱 極の
手拭ひかぶり肩にかけ出した鬼形曲。○キナく
按摩の笛○ヒウ引ヒユ
言継ぎの揖の音○ざイ引く

第二回

いでや此世に生れて人形しかるべき事こそ多かれ
あれと。兼好法師が宜なる哉ん一切の楽欲ハ。

食婬眠 或ハ飲食住 又ハ飲食ありて 此三つを本として心慾り六
葉に立り。形の為に役せられ次第に望ナそし
なるべし。一生涯ハ長るとのべども希望の欲ハ竭る
期なし。古人の「夏ぞうしかまさバ思ふ蒸増を叶へ
ありさを幾種の世ぞ」とあるを悟へ。実に欲界の形
勢さぬべしなるが中ゆゑ寔に蛇の同婆が行状なる
や。凡俗妻子春属の為に止るを得ず。今り求る
欲もあらず。又増賀上人の貪戒を持んとて態と

人心に皆に。内依さるを帰るべきハ。元来厭ふも似
ざるべし。嗚呼天理かる悪婆を生じて欲界乃強
戒に示しのふものを抑此蛇の同婆の来由を尋
ぬるに。父ハ吹売の螺貝とて建長寺の門前にて
ちらしと焼くあきなひ。又新葬などある時ハ寺人の
宮城とて亡者の葬宮を穿ちて旅物を得あるひハ
日雇何人れとなく。其前くの業ひなして幽に世界
流るものゝ姫にて。名をかろちと呼び書う鷲とか

世の聖人。知さるのわきまへ似たり。生質十人並すも
積れ久れバ。此頃なるゝ流行の自極子まもせやれ。
思ふ知機まで。二弦風ひものなど暗ハせ殆々いぶ
せ紀伝屋まで。媚うしう聖を育ける。扨又佐次郎ハ
佐兵衛とて扇ハ谷に出る物。諸女の子せと捨人。
宮病の人也なりしが。但せねものハ死生にて。仮初の
煩ひおもり。佐次ハ生まざ三才の巫の頃牙まり
けり。然るに此速長なるハ大病屋の善徒所なく。

七日く乃ち氣りに。佐兵衛が浮家。幼き佐二ら
を清き。通ひ清とめの番頭に子閑より恩をうけたる
玄氣といへる者。佐二ら紙背負ひ。いつも此おろちが
方にて。番頭などさのへ寺人請る性選に体を。いつと
なく仙易くなりにけり。此玄氣清にも一人の弟あり。名を
玄たらと呼び年の頃佐次らと乙ツ甲ツにて母ハとく
世をさり久れバ。玄たらをバ里にかりて其身ハ寡なく
人也なるが。こゝろき者のなるひ此おろちに深く執心して。

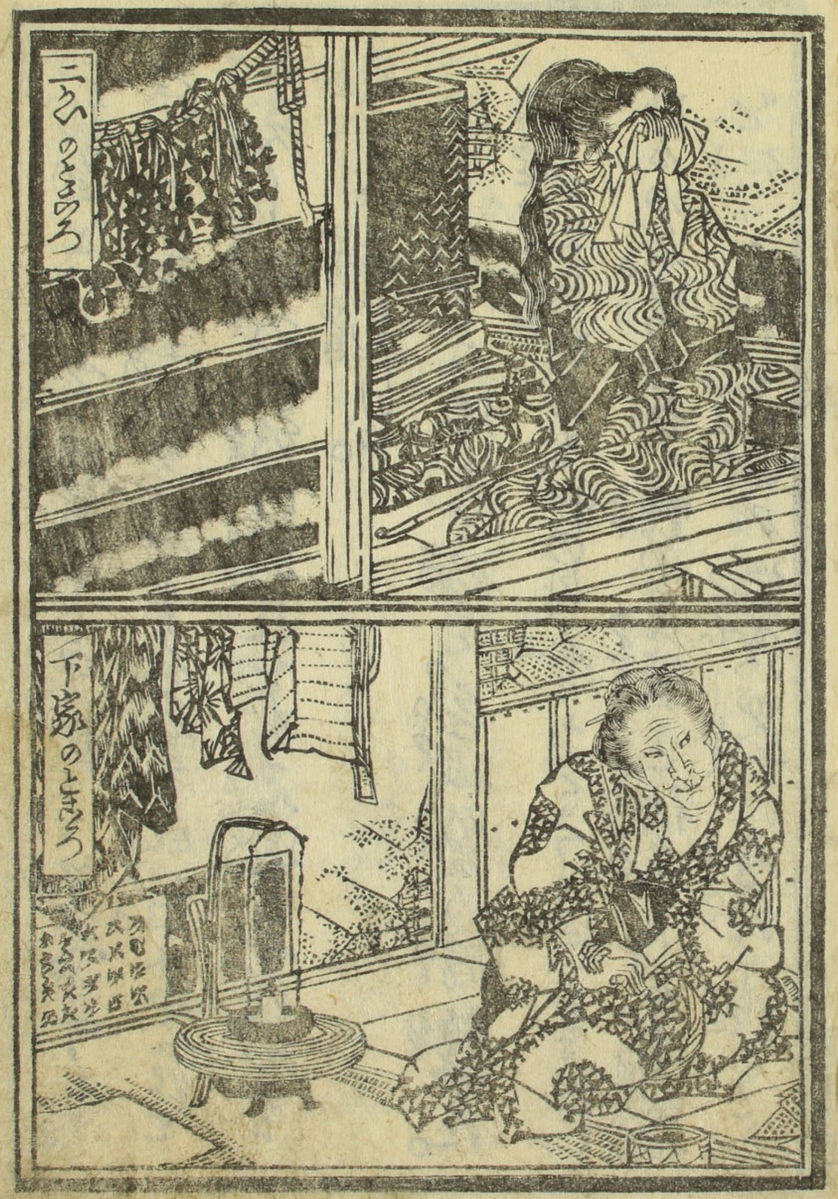
寺詣りにかこたけ志て已く切髪ひ。縁にあるちに訓
そめくる浅さじとかこうひける。此事螺鈿も仏づき
てハ居なぐら。かさより金欲に引かされ。玄三湯大家乃
書院にて金銀の融通自在なるに惹て志ゑね。
うちるね。されバ玄三郎おろちが多に溺き。今ハ人目を
厭ハぜ。日に増月に募り清。衣服誓なぐり入用ハ
更なり。入用のるゝ五郎の分屋牲尻の筆の先に
あやなし。悔ハ米穂の中味噌塩沢庵の崩まで

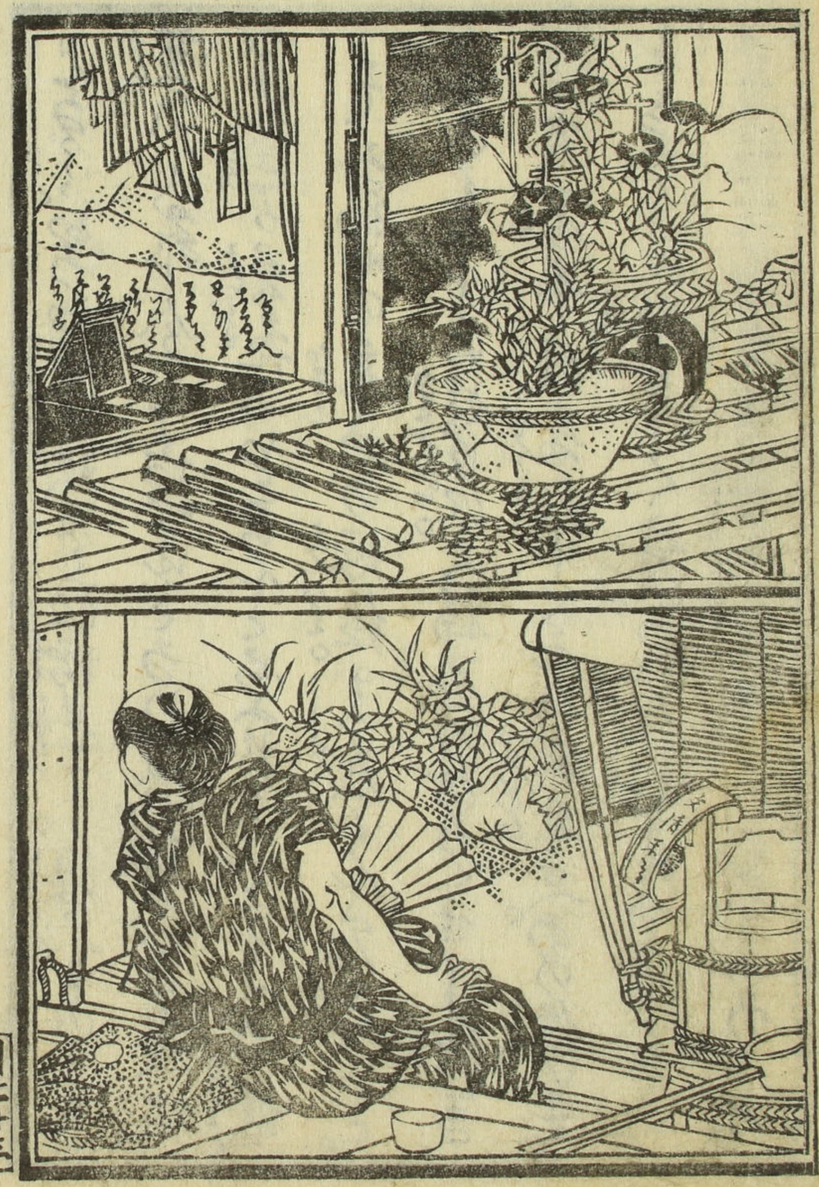
遅ぶ如どに。螺鈿ハよ紀事のかくりしことを自然に推
もおこたり。好める所と酒色ハ耽りくらしけるうくて
玄三郎が行孫一家親類の耳に入り始の程ハ実見を
も加へしが孫法のる見世の不始末。今ハとて一同お達の
のうへ腕をつゞ。佐二ゝ幼かなれバ出分親類と成
るが。かこのごとく佐二ゝが悪なるに。玄三郎が仕取らし
る身上次第に靡保しるぞぜひもなし。扨玄三郎
三郎を追放されしが。いまだ月も覚ぬやありさん嫁を

たのこておろちを迎へ事とすし。軒陰子のきり毎しに
うすうなる裏の和を求め。夫婦ぐらしに世を送るほどにすや
一年も夏とくまけるがら。はおろちに一人の子もなく。公
さびしなど雇物語にるに折ふし。稚兒娘の親とおぼしく。
浪人体育人の事を引て。報謝業ひに来ること日毎なり
なるが。浪人いたり親しく咄して。つゐに此娘を業ひ育て
なる。これ今のお邦までぞありける。はちう人のゆらいかなが
を送る内に。おろちが父吹壺の蝶飛。はほどより俗に

月上十二

云へよいくとりいる病ひにかり。四諸言語自由なるに。
世渡るともなうざれバ玄玄和方へ余氣なく引れ看病
しける。それさへあるに先業の子玄たゞ十字になりしが。
志あしくさ多ぐの恐るゝつのて。此末見さだけがしとて。
里親より頂きれなる。さなほどに世渡りも薄れ玄玄和。
尼女のふえるに急却しなるに。かてて加へて玄たゞ所
跡まずくあしく。僧材噌嚏の麁文こえて止時なく。
なけなし此衣被器材質屋の恵文に殆せんしやう


二ちひのときのろ
下家のときのろ



大福屋をいくぶり揃めしるす。枚さく算へぐらし。
あげくの果に己まづ幼にまうせぬまた。終におんにを
呑尻し。姑の一段の別れをも見送らせぬ。かゝる
るまハ物けける。
此ぐもとより猶手を好き。衣服髪の隙整ひ。
一寸の出歩けにも。蛇の目傘ふごとさしぎ。なまめし
けるゆゑ。いつとなく蛇の目縫と仇名しける。此頃
を伝うされバ。お俗の編次四女に命ぬし難うんと。

月上十四

而猶手の方言。余汁のまどるゝん乎
さるなどに蛇の目ぞハ。お邦を引立コガ敷へ立ちへり。
路次の戸あらくうちたる。綻がら〳〵とこぢあけて。
あたりを而もまの別る。青の灯丸魚油さへ。心乃
闇のくらがりに。おんにを引立ゑ居丈高 蛇 コレ あゆよ。
イヤこな悪ふ。ぬよ。ようまゆんがへてもゑろ。おの
しやゆりがとな揃うとくをもつてサ。べんべらるりと見
此蚕にくるまつてゐるとも無い。コレ人とのかものハナ首

をコチれちやア望利がつきるぞよ。カウトコれが七ツ八ツの
時であるこちう。あのおやぢれどう瞽のまを引て。コりや
もらつてあるいてこぞよ。そこを天屋人ころさぬで。はなしが
同にかゝれがおのれが仕合せ。さくひあげてやるこぞヨ。
トかぐうちつで
こゝをこゝき
コりやこれ神ゆとけにうけるまでのじや。夫
から庵廃麻疹の丹精。ヤレうれしやとおゐるも
なく。アノごくぞなしの佐二ゝ人姫いり。だまされてきち
こがくやしき。ちつともたやくとりしも。安堵せうとおゐ。

月上十五

悪ある邪の知も志らぬ。いらざる義理ぞてあるくさろうく。
せいてツぱい事をもませ。なりくのことで恐戻しし。ヤレうまし
しや。これから楽をせくとおゐ。ところで又アノ悪ふ事と
男ぐるひ。イヤモウあんまりのるすで。あきれて物がいはま
ねへ。ヨシくこれがさう侭姫地よせりやア。ころちも志附
ぼくぢや。これう生れのねへ母。コゞ身を年いつぱいに
賣とうし。ちつと楽をせまやなるね。一寸のびまてだ弱
のびる。これから大砲へ注くまゝ。あとに身ぶ

何や角ちの度して待てゐあまし。ソレ挑灯よ山岡系
よ。ト漁ぎを吹て其屋並光屋の親子げんを。冬ハ
ものとハ思ひるぞう。きろねふりにもるゝねが浜紀合。隣
の駕舟屋のかゝ食が。おるべ仕業の綿を揚さし。
うけつまゆるに生ハ晴がり。これでハるゝねとうけのどり。
蛇をゆく料に捨へし。呉服屋の夏物の引れまく。
るまゝ水くより紙燭をとりし。とろ久ハうけこゝ行燈へ
灯を揚し。釘を曲ゝうきこそ推で灯屋をうきこゝせ

月上十六

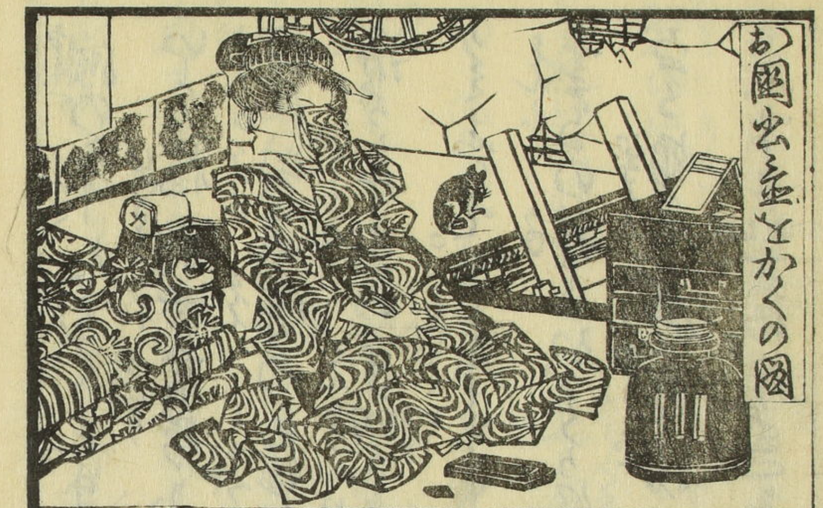
るぞう 「コレサまゆどういかまけうまゝんが。こゝる和尚に
マアくおつうさん場恐るきいまし。コレ お邦さんおまへも熱い
ハな。何でもおつうさんがとりいるゆゆひなさんねへ。サアく浴て
ゐずとあやまんなさるがいく 「イヤうんちやつて盃ておくん
るきい。此女が甘い 那でくる女ちでハるのさ。サアく手と
いつて来ますどうぞ留るをお粉んやまへ 「それでも
あんまり和尚で抱漁ぐろう。おが明てうう 「イヤさう
悠長ましてハゐられぬ。サア あゐよきりく髪でも結て

支度してみられ。ザアおさのんやますトてうちん道具○お郁八
始終さへしらい田舎兄何と言ふ事もならじやらのあのと
主八いひさゞかわんまりさおりじやけん。主八は人十六の年
より育てられ背丈のびしてあらやる。親といふ字ハ
削られまいに。恩に二ツハなけれども生別迄は一と字の親
十年余の便りもなし。どうしてやろと日頃の案じ。その
うへ夫にまでも生別れ。マアなにしてかする因果な者ぞ。
又と世にあらうかなトくどきたてる嘘洞ふびんの

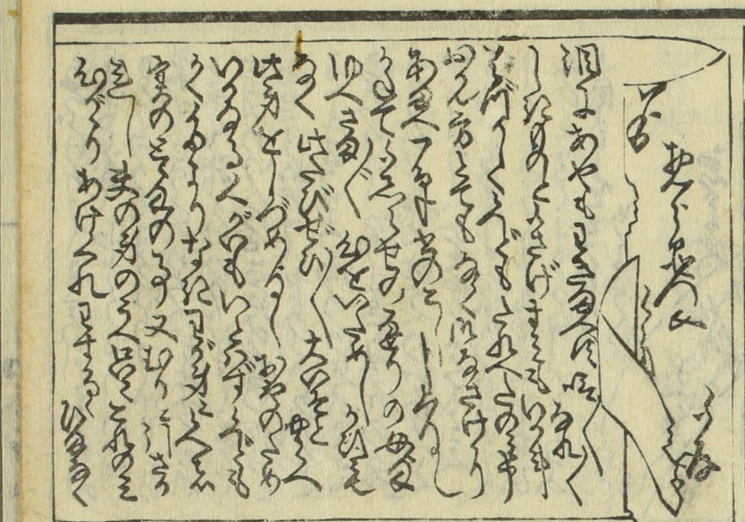
なぎさの夫まきものを見て主ればあき喜び遊して
鶯谷屋の妻「コレサおまへもまアおつうさんの生別八
日頃くまなくそのうさ。きつと可ぞと心にかかれるおろ
つらき時そろへひとこびして見るぞよぞのの。トなきやするして立ちやる
○あたに此お郁八やまびくし又話喜ぶまゐ候はじがなき
そうち嘆して来方行末おもひ出し涙をそそぐ○
て使命の男語り 郁「ききおやまと旦も元八武士の
流中なる親の縁しの利よるべき事そぞろに

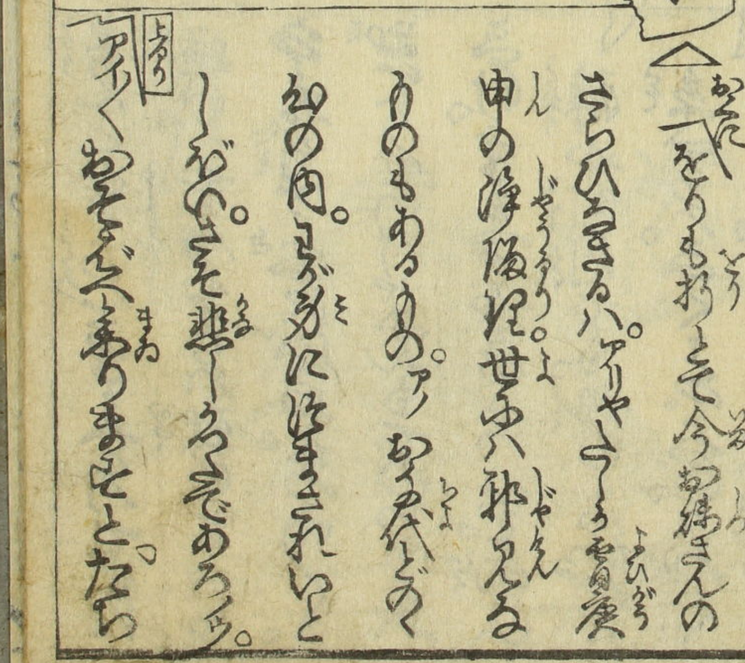
るつて六生の親の和まもる。美くの人に出来ず勅め。
親の安否も皆々乱し。又をつとの行衆を務ずて三人。
それにつけてもアノ悪衆さんの深切つひに一度いや
らしいともなく。合点のゆかねあの人は身の上。いろぞ六
皆さうとも云内。却て親の邪見也。然もまたりがましいあの
志ざら。どうで流れの身となる此身。せめて一云出来し。
悪衆さんの心の内皆々も志てし。こちらの胸もうち
あけて。ドリヤ一筆。ト指筒の記にてしきへもかけ候。

洞の雫たらくと。まがり形なるする雲の。幸年に
いとゞ株別や、苦労に積のきしとして。九尺二ゐの俺
住に。此世の縁乃薄縁も。せまに二階の帆燈の新。
雅が年玉の半切。気も亂が実詰し。単に命を
かこ志めて。出来るのも得やはんなき。ちきき鳥偶。
幸るの種もわがらかに。をりから皆ゆる東陣。十一二
なる姫子の。修羅場四丈ばんかこあげの。まごこ気氣
さへすこ鬢の。とゞきそろハね。高田舘ねばけ声に



おそびきよりおそくおれやせんと
ゆうべのよるより
あうことへねれさびん
のべつそれべはせのおもとこへど
しやくあれこる酒やうでをる
ヨコ字なのもこるこうの
日れ紙へ時へそ拍子五こる拍
ぢやようひやうやうやうぎと
こくおもへのまごこれがこうこう





こくくと掛そで声。
をうもおうこそ今お爺さんの
さらひるまるハアリやうこうを夏
申の浄瑠璃世中八郎兵衛
りのもあるのアノおそ代どの
ゆの内。ヨゴ多に泣きされいと
しぢやこそ聴ーうこでおろッ。
アリくおそぢこまりまそこたち

隣の娘浄るりを浄る

「イヽエ おまえ樂ぶらい姑様に何の。なんのと絹ばかりにて。
かつぱと仕て泣ねて居る」△「アノまア悪てしい八百屋の婆。
とさそぢハ遠くども。佐渡さんがアノ半三度と云うの女う
ならバ。どうか仕様もあらうものを何をいふまもあらうしい
生れ奨。アヽイヤ〳〵勿体ない事のるすと。おんに世の恩の
あり。君仁なる事が可惜いと。アノおろうしい佐渡さん。
ほうしが付てゐてさんに。人にさんぐ侮る事。ぐくや
志うなるぞ。さぞ今ごろハ使りずくなく。ざうして書して

月上廿二

達者なり。姫ハ出やせぬかと。いとしい女うまでいかう。
それにつけても勿体ないが。恨めしいハアノかさん
おのまがいなともない母じや人に何の恨。自首陳入る
めんごうなと小猿ゑて門口に引出せ此男もついたの。
のちにくとさて来て国まぜに女ぞ此名称の滅よりる
ゑをゑらまじと門口だつて見せ。ぐるつて。△
門の戸ぐるひ来つり 上より
と明け 上より
「時も時分も六ヶに狗ハ月はなれ来ハて。

初死鍋ちゃぼくだりまり。△蛇「サアのぞろこぞく。
おさまりれおりまさん。大名におせうとまる。ヤイおまつちよサア
すゝ度へいふ。トいひたるぐらゐたゞしごの あひごうこうのぞきて まで二階にけつうるう。
おりろよく。ヤモだるいおまごぞ。
○建長寺胡動の達「ボヨリ〳〵
○お邦を運ひのかごろ紀
「おぐさんいそのでくんるせ
○郷付の火をしきをたくる

幽賞雲間月上巻終

書林 善光寺大門街 句榮堂 蔦屋伴五郎

月上卅二冊